

町長 施政方針

大槌町議会 3月定例会において町長が町政運営について述べた施政方針演述の内容について、抜粋してお伝えします。

総合計画の着実な実施

復興計画期間は、平成30年度で終了することから、これまで町の行政経営の基本方針を示す最上位計画となる「第9次大槌町総合計画」の策定を進めてまいりました。町の現状を肌で感じている町民の方々と、膝を突き合わせた対話・議論・検討を重ね、今後10年先の大槌町を見据え、安心して暮らしていく魅力あふれる町の将来像を実現する計画に仕上げました。

当町は、東日本大震災津波からの復興へ着実に取り組んでまいりましたが、人口減少と少子高齢化の進行は今後のまちづくりにおいて、喫緊の課題であります。この課題への取り組みには、現状と将来の見込みをしっかりと捉え、適時、適切な取り組みを進めてい

かなければなりません。そのためには各分野の施策を有機的に連動させ取り組むことが、地域経済や地域産業の活性化を図ることとなり、持続可能なまちづくりに繋がるものと考えております。

各施策を着実に取り組み総合計画の基本理念である「魅力ある人を育て新しい価値を創造し続けるまち大槌」の実現に向け、町民と行政の協働のもと、被災者や町民に寄り添った復興の総仕上げに向け、総合計画を着実に進めてまいります。

平成31年度予算の特徴

平成31年度は、復興の総仕上げに向け、各施策の加速化を図らなければなりません。

平成31年度当初予算においては、復興から新たなステージを目指し「魅力化」と「チャレンジ」をキーワードとし、「おおつち」の多面的な「魅力化」を図り、魅力を発信しつつ、新たなステージへ果敢に「チャレンジ」する予算として編成いたしました。

編成にあたっては、人口減少により町税・地方交付税は被災以前より減少傾向である中、今後の財政状況を注視しながら事業の「選択」と「集中」に

よる成果の実現に努め、未来の町民へ「樺（たすき）をつなげ、復興後の「強い」まちづくりを図るため、人材と産業の創出などへ「攻め」の姿勢による事業展開を図ってまいります。

平成31年度の主要施策の概要

平成31年度における具体的な施策であります。第9次大槌町総合計画に掲げる将来像の実現に向け、各種計画と連動して次のとおり取り組んでまいります。

- 【産業・観光】
 - ・農林水産業の振興・商工業の振興・観光振興の更なる促進・移住・定住の促進
- 【健康・福祉】
 - ・地域福祉の推進・子育て環境の充実・健康づくりの推進・認知症総合支援の推進・障がい福祉の推進・医療の充実
- 【教育・文化】
 - ・教育の充実・生涯学習の促進とスポーツの振興・震災伝承の推進
- 【安全・快適】
 - ・一日も早い住まいの確保とさらなる支援・中心市街地の活性化策・災害に強いまちづくりの推進・復興道路の整備、土坂峠トンネル化の取り

組み・交通環境整備の推進・利便性の高い交通ネットワークの推進・斎場整備の推進

おわりに

まちづくりには、町民の皆様、各種団体や関係者のみならず、各分野の方々と現場で向き合い対話しながら、現状をしっかりと受け止め、きめ細やかな対策を講じながら進める丁寧な取り組みが必要です。これから進める総合計画を着実に実行に移していくことが肝要であり、復興の総仕上げに向けて実情に寄り添い、きめ細やかな支援に取り組んでまいります。

当町では、人口減少、少子高齢化の加速にともない、今後ますます厳しい状況になります。

町民の皆様並びに議員の皆様におかれましても、このことを重く受け止めて、いつでも「この町に住みたい、住み続けたい」と思える「魅力的で」「安全安心なまちづくりが実現するよう、大槌町への「愛着と誇り」を持ち、総合計画のテーマである「魅力ある人を育て、新しい価値を創造しつづけるまち大槌」を目指し、次世代に継ぐ明るいまちづくりに共に取り組んでまいります。



大槌町東日本大震災津波 追悼式

3月11日（月）、大槌町東日本大震災津波追悼式が行われました。式典には町内外から多くの方々が参列し、午後2時46分のサイレンとともに黙祷を捧げました。また、式典の前には一般献花が行われ、訪れた人が祭壇に花を捧げました。

平野公三町長は、「8年が過ぎ街並みが変わっても、私たちの胸の奥には、いつもあの日がある、あの人がいます。犠牲となられた方々と共に暮らした、共に共有した時間や思い出は、決して薄れることはなく、これからもずっと、私たちがしっかりと『忘れず』、そして『伝えて』参ります。二度とあんな悲しく苦しい思いはしたくない、そのためにも、震災教訓を後世に伝え、防災教育、防災訓練などを通じて、防災、減災に取り組むことをお誓い申し上げます」と祭壇に語りかけました。

遺族を代表して追悼の言葉を述べた上野拓也さんは、「人は一人では生きていけない、そして、人の支えがあれば、不可能と思っていたことが可能となるという現実を実感した8年間だった。人と人とのつながりがある町を再

び創り上げていくことが次世代への贈り物になる」「まだまだあの日の記憶から抜け出せない方、仮設住宅での暮らしを強いられる方、新しいスタートを切ることができない方などがいらっしゃると思います。一人ひとりが、自分のタイミングで歩き出せるまで待つ優しさを持った町にしていきたい」と願いを込めました。

最後には、生徒代表として吉里吉里学園8年の三浦将さんが追悼の言葉を述べ、「今思うと、自分たちもつらい思いをしたに違いない家族や地域の皆さんが、僕たちが安心して暮らせるよう支えて下さっていたことが分かり、とても感謝しています。この町の未来がより良いものになるよう、この町で暮らす一人として自分のできることに真剣に取り組んでいきます」と誓いました。



遺族代表 上野拓也さん



生徒代表 三浦 将さん

